

## 感謝の意を込めて

岡田 聡宏

松島先生、本日は最終講義、お疲れ様でございました。久しぶりに先生の授業に出席し、非常に懐かしい気持ちでございます。私が、先生の授業に初めて出席致したのは、1991年、博士前期課程1年の時のことでございます。当時、シェリーの詩を読んでおりました、ご指名により、私が‘Ode to the West Wind’の担当をすることになりました。詩の読み方も分からないまま、一語一語に込められた意味を探りながら、ひたすら調べ、苦勞しつつもむしろ読むことを楽しみながら発表の作業を進めていったことを記憶しております。当時のことは今でもよく覚えておりました、例えば、詩の中に‘Like the bright hair uplifted from the head / Of some fierce Maenad...’という一節がございますが、発表の際に、バックスの巫女であるメナードの発音を半ばごまかしながら読みましたところ、即座に「これは/mi:nad/ではありませんか？」とのご指摘を

受けましたこともはっきりと記憶に残っております。

この大学院の授業が切っ掛けとなりまして、その後も、学会発表や論文執筆などの機会がある度に、先生にお声掛けいただき、私と致しましても、期待に応えられるよう努力したことをよく覚えております。私の専門は言語学でございます、直接の師は今井邦彦先生でございます。今井先生には、現在でも懇切なご指導をいただいておりますが、研究者として今日に至るまでの第一歩を踏ませてくださったのは、松島先生であると認識致しております。先生には、これまで陰に陽に支えていただき、軌道から外れぬよう、常に前へ前へと導いていただいているような気が致します。現在、私は、隠喩などのレトリックを中心に、概念の分析を行っておりますが、当時と現在とで分析の手法は異なるとはいえ、そもそもレトリックに関心を持つに至ったのも、松島先生の影響でございます。

以上のように、言語学を志す私までもお仲間に加えていただき、ご指導を賜っておりますことには、衷心より感謝致しております。先生は、数多くの教え子を、在学時のみならず、10年、20年という単位で、親身に面倒をみてくださる方で、この点につきましては、私にはとても真似ができないことと、心より敬服致しております。

最後になりますが、27年間に亘る御講義、お疲れ様でございました。最終講義も終わりさびしくはありますが、いつまでもお元気で、これからも輝ける中心として、私どもをご指導ください。

(外国語教育研究センター教授)